

シリーズ 今、世界史で何が議論となっているのか③

他者との共存・異文化の受容

——イベリア半島における宗教的並存を中心に

阿部 俊大

キリスト教とイスラーム

他者とは誰か。どのような人々が自分にとって「仲間」「身内」で、どのような人々が他者なのか。そのように人間集団を区別する指標の1つとして、人種や言語、身分などと並んであげられるのが宗教である。世界史の教科書を開くと、歴史上、宗教に起因する対立がしばしば存在したことが記述されている。十字軍や「レコンキスタ」^①、近年のアル＝カイダやターリバーンの活動、またそれに起因するイラクやアフガニスタンでの戦争など、即座にいくつもの例をあげられるだろう。

上であげた事例は、基本的にキリスト教圏とイスラーム圏のあいだのものである。教科書記述などをみても、世界史上、宗教的対立としてとくに目につくのがキリスト教とイスラーム教のあいだの対立であることは否めない。とはいえ、両者はつねに対立していたわけではない。イスラーム圏との地中海交易は中世ヨーロッパの経済的發展を支えたし、ラテン語に翻訳されて伝わったイスラーム圏の学問的成果は、西欧に12世紀ルネサンスと呼ばれる文化的發展をもたらした。このように、両者のあいだには協力的関係やその歴史的成果の事例も数多く存在する。彼らはどのような場合に、どうやって非敵対的な関係を築くことができたのか。キリスト教徒とイスラーム教徒のあいだの歴史的関係を分析することで、宗教的な他者とのあいだで、必ずしも対立的ではない関係が築かれた、多様な歴史的事例を認識することができるだろう。

中近世における相互対立

キリスト教とイスラーム教は、ともにオリエント地域(パレスチナとアラビア半島)で発生し、またローマ文明やビザンツ文明の影響を受けつつ發展した。このように歴史的・地域的な背景や文明のレベルが近く、かつ長期間にわたって広い地理的範囲で隣接して存在してきたこともあって、両者のあいだではしばしば衝突が生じてきた。

7世紀前半にアラビア半島でイスラーム教が成立すると、イスラーム勢力は100

①「レコンキスタ(再征服)」は、中世のイベリア半島における、キリスト教諸国のイスラーム＝スペインに対する征服活動の総称。近代以降の用語で、その言葉自体に「取られた国土を取り戻すための正当な戦争」というイデオロギー的な意味が含意されている。

年たらずのあいだにビザンツ帝国からシリアやエジプト、北アフリカを奪い、西ゴート王国を征服するなど、キリスト教圏の多くの地域を征服した。11世紀後半からはキリスト教側が攻勢に立ち、十字軍や「レコンキスタ」が進展する。その他、セルジューク朝のビザンツ帝国への攻撃や、オスマン帝国によるビザンツ帝国の征服(1453年)やウィーン包圍(1529年・1683年)など、中世・近世を通じ、両宗教圏のあいだでは多くの軍事的対立が生じていた。

これらの諸地域のなかで、もっとも長い期間、両宗教圏のあいだで多様な接触がもたれたのがイベリア半島である。この地域では、ウマイヤ朝の西ゴート王国侵攻(711年)から、スペイン王国によるグラナダ王国攻略(1492年)まで、800年近くにわたり、キリスト教国家とイスラーム国家が対峙し、キリスト教徒とイスラーム教徒が並存する状況が存在していた。この間、イベリア半島において、両教徒は、実際にはどのような関係を築いていたのだろうか。

イスラーム支配下のキリスト教徒:モサラベ(8~12世紀頃)

イスラーム勢力がシリアやエジプト、北アフリカやイベリア半島を征服していく過程で、多くのキリスト教徒がイスラーム国家の支配下に置かれることとなった。スペイン史では、イスラーム支配下のキリスト教徒はモサラベ^②と呼ばれる。

②「モサラベ」は「アラブ化した人々」を意味する。

当時のイスラーム勢力は、基本的に、征服地の住民には服従と貢納を課すかわりに生命の安全を保障し、従来の信仰の保持や、同じ地域に住み続けることを認めた。征服者の人口は少なく、非征服者に生産活動と納税をおこなわせる必要があったためである。また、成立して間もないイスラーム圏では行政制度も整っておらず、各地で旧体制を引き継いだ統治がおこなわれており、イベリア半島も例外ではなかった。モサラベたちはキリスト教徒の指導者の下に置かれ、内部の紛争は西ゴート法典にもとづいて裁かれるなど、一定の自治を認められていた。

ただし、モサラベはイスラーム教徒に比べて多くの経済的負担を負い、またイスラーム教徒との裁判ではイスラーム法で裁かれるなど、様々な点でイスラーム教徒に比べて不利な、いわば二級市民の地位に置かれていた。また、文化面では、西ゴート王国由来の当時のモサラベの文化に比べ、東方の進んだ灌漑や農業の技術、学問や生活文化を吸収したイスラーム文化に一日の長があった。世代が交代し、アラビア語やイスラーム文化に馴染んでいくなかで、一級市民としての立場や、進んだイスラーム文明やそれがもたらす生活の豊かさに憧れ、イスラーム教を受け入れるモサラベも現れ、増加していった。イスラーム支配下に入ってから、数百年かけて地元民の改宗が進むのは、エジプトやイランなどと共通した現象であった。

無論、宗教的な対立がなかったわけではない。9世紀半ばには、モサラベたちのあいだで、わざと公衆の面前でイスラームの教えを侮辱し、処刑されることで殉教しようとする、「コルドバの殉教」運動が発生する。これは社会のイスラーム化の進行に対する、モサラベ側の危機感の表れといえる。また、北方のキリスト教圏へ流出するモサラベも存在した。なお、ムワッラド(イスラームに改宗した元モサラベ)の有力者と後ウマイヤ朝政府のあいだで争いが生じることもあったが、これは宗教

的対立とはいいがたい。アラブ系やベルベル系の有力者も頻繁に同様の反乱をおこしていたし、宗教の差異が争点となっていたわけではなかったからである。北方のキリスト教国家やファーティマ朝と結んで後ウマイヤ朝に反乱をおこし、キリスト教やイスラーム教シーア派への改宗を繰り返したイブン・ハフスーン(850?～917)の事例が示すように、宗教の枠をこえた合従連衡も数多くおこなわれていた。

いずれにしても、数は減ったにせよ、後ウマイヤ朝期のアンダルス(イスラーム＝スペイン)ではモサラベ共同体が存続し、教会組織も維持されていた。10世紀には人口の過半数がイスラーム化していたと考えられているが、モサラベたちも聖書の一部や年代記をアラビア語で記すなど、周囲のアラブ・イスラーム文化へも適応しつつ、信仰を維持していた。

11世紀末、より厳格なイスラーム教を奉じるムラービト朝がアンダルスに進出すると、この状況は変化する。1126年にはモサラベのマグリブへの強制移住が大規模におこなわれ、アンダルスの都市部からモサラベが姿を消した。アンダルスで数を減らす一方、「レコンキスタ」が進展するなかで、キリスト教国家の支配下に入るモサラベたちも増加した。また、キリスト教圏へまねかれ、移住するモサラベも存在した。こうして、モサラベは姿を消していった。

このように、信仰的に過激なムラービト朝やムワッヒド朝を除き、イスラーム側には信仰を理由にキリスト教徒を排斥する姿勢は必ずしも強くなかった。その他の歴史上イスラーム勢力が支配していた地域でも、エジプトのコプト教徒やバルカン半島のギリシア正教徒、またシリア正教徒などが現在まで存続していることから、この姿勢はイスラーム圏にある程度共通したものと考えることができよう。

なお、カロリング朝のカール1世(大帝、在位768～814)は、アッパース朝やマグリブのアグラブ朝に外交使節を送り、ビザンツ帝国や後ウマイヤ朝への対抗をはかっていたことが知られている。またビザンツ帝国では、イスラーム側からの偶像崇拜という指摘を受け、8世紀から9世紀にかけ、聖像破壊運動がおきている。当時のキリスト教世界全体も、必ずしも宗教だけにもとづいて外交的態度を決めていたわけではなく、政治的利害にもとづいて行動していたことや、イスラーム側からの宗教的問い掛けを真面目に受け止め、対応しようとしていたことが理解される。

パワー・バランスの変化(11～13世紀)

11世紀頃から、両宗教圏の力関係が変化していく。イスラーム圏は多くの国家に分裂し、またイタリア都市の活躍などで、地中海の制海権はキリスト教圏に移る。ノルマン人がシチリア島を征服し(～1071年)、十字軍活動が開始(1095年)される。

イベリア半島でも、11世紀初め、後ウマイヤ朝が分裂すると、北部のキリスト教国家はアンダルスへの征服活動を活発化させた。ただし、この地域では戦闘は必ずしもキリスト教徒とイスラーム教徒のあいだでおこなわれたわけではなく、キリスト教諸国と各地のイスラーム小王国(ターイファ)は、宗教の枠をこえて合従連衡をはかり、生き残りや勢力拡大をはかっていた。たとえば、ムワッヒド朝がイベリア半島に侵攻した際には、前のムラービト朝の残党や在地のイスラーム勢力が独立政

権を築き、カスティーリャ王国などと同盟して抵抗を示した。

とはいえ、全体としてはキリスト教諸国がイスラーム圏を侵食していく傾向がみられた。キリスト教徒たちにとって、イスラーム教徒たちは、それまでの「畏怖の対象」から、「恒常的に対峙している、征服可能な相手」へとしだいに変化していった。キリスト教圏の攻勢の過程で、モサラベとは逆に、キリスト教国家の支配下に置かれるイスラーム教徒の住民も発生した。彼らはスペイン史ではムデハル^③と呼ばれる。「レコンキスタ」が大規模に進み、グラナダ王国を除く全アンダルスがキリスト教側に征服された13世紀前半には、とくに多くのムデハルが発生した。

③「ムデハル」は「残留した者」を意味する。

キリスト教徒支配下のイスラーム教徒:ムデハル(13~16世紀頃)

ウマイヤ朝が西ゴート王国を征服した時と同様、カスティーリャやアラゴンがアンダルスを征服した時も、基本的に、征服地の住民には服従と貢納を課すかわりに生命の安全を保障し、従来の信仰の保持や、同じ地域に住み続けることを認めた。やはり、征服者の人口が不足し、非征服者に生産活動と納税をおこなわせる必要があるという同様の状況が存在したためである。イスラーム教のグラナダ王国やマグリブが近かったカスティーリャでは、ムデハルたちは1260年代に反乱をおこし、その後、ほとんどがイスラーム圏へ流出した。ただし、カスティーリャ国内で移住し、小規模(ほとんどが100世帯以下)な共同体^④を形成して残留するムデハルも存在した。また、アラゴン連合王国のパレンシア地方のように、多くのムデハルが残留し、15世紀末の時点でも人口の3割以上がムデハルであるような地域もあった。どのキリスト教国家でも、ムデハルには「公職につけない」「キリスト教徒以上の税が課される」「キリスト教徒との接触を制限される」といった制約が存在した。その一方で、彼らの共同体では、イスラーム法にもとづいた裁判、カーディー(裁判官)その他の役職者の自由な選出、イスラームの領土への移住が認められるなど、少なくとも征服当初はおおむね広範な自治が認められていた。この状況は、後ウマイヤ朝支配下のモサラベの状況とかなり類似したものといえる。

④ムデハルやユダヤ人の共同体は「アルハマaljamā」と呼ばれた。

ムデハルは、とくにパレンシア地方では、王領地や聖俗諸侯の所領で、すぐれた農業技術を有する農民となった。また、都市部では建築や製紙業、金属加工などの職人として活動した。ムデハルとの並存を通じ、建築や美術、生活文化などの面で、キリスト教社会へイスラーム由来の文化が伝播していった。このようにキリスト教社会(国王だけでなく、教会や貴族などの領主層、また民衆)にとって有用な存在であったことが、彼らが数世紀にわたってキリスト教圏で生き残った大きな理由であった。ユダヤ人と異なり、徴税請負人や金融業者など民衆の恨みを買う職業につかなかった点も重要といえる。

また、モサラベの場合と同じく、ムデハルたちは異教徒の統治や社会に努力して適応を示した。キリスト教徒による征服後、ムデハルのエリート層はしばしばイスラーム圏へ流出したが、ムデハルたちはアルハマやモレリア^⑤などの共同体の内部構成を変化させ、これに対応した。特定のムデハル家系は、王権やキリスト教徒領主家系と接近し、カーディーなどの職務を世襲することもあった。兵士としてカス

⑤「モレリアmorería」はイスラーム教徒(モーロ人)の居住区域を意味する。

ティーリャやアラゴンの国王に仕えるムデハルも存在した。また、一般にイスラーム法はキリスト教徒の法よりも厳格であったため、裁判に際し、ムデハルたちがキリスト教徒の法で裁かれることを望む事例もみられた。イスラーム圏との交易など、特定の分野ではキリスト教徒とムデハルがともに事業に参加することもあった。

このようなキリスト教社会への適応は、一方で、アラビア語の能力が衰えたり、イスラームに関する知識や認識がイスラーム圏のそれとずれたりしてしまうというリスクを伴っていた。各地のムデハル共同体は、グラナダ王国などに若者を送って学ばせたり、イスラーム法をロマンス語^⑥に訳したり、ロマンス語をアラビア文字で表す(アルハミーア)など、様々な手段で(キリスト教社会に適応しつつも)文化やアイデンティティの維持につとめた。

注目すべきは、多くの地域と期間において、支配者側がムデハルにキリスト教を強制しようとしなかったことである。征服直後の時期には、ムデハルに対してキリスト教の宣教がおこなわれることもあったが、基本的に成功しなかった。当時のキリスト教徒にとってもイスラーム教徒にとっても、宗教を捨てることは、それまで自分が所属していた共同体や人間関係、また慣れ親しんできた生活習慣を捨て去ることに等しかった。圧倒的な文明の魅力、または権力による強制等によって、集団全体が改宗するのでもなければ、宗教的な転向はほぼ望めなかったであろう。中世後期には、イベリア半島内部のキリスト教徒とイスラーム教徒のあいだに、文明のレベルでの差異はほとんどなかった(どちらかといえばイスラーム側が高かった)であろうし、王権も異教徒からはキリスト教徒より多くの税が徴収できるため、必ずしもキリスト教への改宗を望まなかった。このため、ムデハルに対するキリスト教の宣教は早い段階でおこなわれなくなっていく。こうして、結果的にはあるにせよ、他者を自己に同化しようとするのではなく、差異を認識したうえで他者として存在し続けることを容認する、現代社会においても先進的と評価できる姿勢がキリスト教徒側に形成されていった。

ただし、キリスト教徒とムデハルが完全に友好的であったと考えるのは幻想であろう。先述のような様々な協力や分業の事例がみられる一方で、両者は居住地区をわけるなど、過度な接触は制限されていた。日常的な生活習慣の相違など、それ自体は小さな事柄でも、日々目の当たりにすれば、違和感が積み重ねられていく。そして何かきっかけがあれば、それは容易に嫌悪感や攻撃に転じ、殺し合いに発展しうる。キリスト教側とムデハル側双方がそれを自覚し、住み分けがなされていたのである。このような両者の関係を示すには、過度な友好や融和を連想させる「共生」といった言葉より、たんに同じ地域に存在していた(住み分けていた)ことを示す「並存」という言葉が適当であると思われる^⑦。

このように、新たな社会状況に適応しながらも、工夫を重ねてアイデンティティの維持につとめ、キリスト教社会と適度な距離を維持したことが、ムデハルが数百年存続できた理由であるといえよう。ムデハルに対しては激しい暴動や迫害はあまりおこらず、15世紀にはファン・デ・セゴビア(1395?~1458)のように、人文主義の影響を受けて彼らとの平和的な対話をはかる聖職者も現れた。

⑥「ロマンス語」は、俗ラテン語に起源をもつ言語の総称。ここでは、中世カスティリャ語などのキリスト教スペインの言語を指している。

⑦スペインをはじめ欧米の学界でも、近年では「convivencia(共生)」よりも「coexistencia(並存/共存)」という用語を使用する傾向がみられる。

並存の終わり

しかし、黒死病の流行や、あいつぐ戦乱による社会不安のなかで、イベリア半島でも14世紀末頃からしだいに反異教徒感情が高まり、ムデハルへの規制も強化されていく。また、カスティーリャ女王イサベル(在位1474~1504)とアラゴン王フェルナンド(ファラン) 2世(在位1479~1516)の結婚によってスペイン王国が成立すると⑧、両者は多様な国土をカトリック信仰によって統合する政策をとるようになり⑨、グラナダ王国の滅亡からほどなくして(16世紀初頭)、ユダヤ人と同じくムデハルもキリスト教への改宗か国外退去を迫られるようになる。さらに、カトリック両王の孫で、のちに神聖ローマ帝国皇帝も兼ねるカルロス1世(カール5世)がスペイン王(在位1516~56。神聖ローマ帝国皇帝としては在位1519~56)になると⑩、キリスト教徒となったムデハル(モリスコ)への迫害も強化されていく。17世紀初頭にはモリスコも国外追放され、イベリア半島におけるムデハル(とその子孫)の歴史は幕を閉じることとなった。

まとめ——モサラベとムデハルの事例から考えられること

イスラーム国家の下でキリスト教徒住民が居住し、キリスト教国家の下でイスラーム教徒が居住するなど、両教徒が多様な形態で長期間並存していたイベリア半島の事例は、われわれに何を示しているであろうか。

まず、両者が対立する際、その理由は必ずしも宗教的なものではなかった。中世のキリスト教勢力諸国とイスラーム勢力は、しばしば宗教の枠組みをこえて合従連衡し、抗争を展開していた。中世末期のムデハルへの弾圧は社会不安が影響していたし、カトリック両王やカルロス1世による弾圧も、宗教的というより政治的な動機によるものであった。モサラベにせよムデハルにせよ、支配者側とも協調し、社会にとって有用な存在となり、様々な工夫を凝らして争いを未然に防ぎながらアイデンティティも維持し、数百年にわたる並存を可能にしたのである。

そして、それらの工夫や並存関係のなかから、他者を許容する近代的な姿勢や、さらには宗教の相違を必ずしも他者の指標としない、ファン・デ・セゴビアのような態度も生まれている。これらは、地中海交易や12世紀ルネサンス、また建築や美術、生活文化の発展と並び、キリスト教徒とイスラーム教徒の並存が生んだ偉大な成果といえることができる。

現代の社会では、他者(人種なり言語なり宗教なりが異なる人々)と一緒に社会を構成していく必要性が日々高まっている。上記の中世——宗教がおそらく何よりも重要な他者の指標であった時代——におけるイベリア半島の事例は、そのような「他者」との共存／並存を考えるうえで、多くの示唆を与えてくれるのではないだろうか。

(あべ・としひろ／同志社大学文学部文化史学科教授)

⑧結婚の時点では、正確にはフェルナンドはまだ王子であった。

⑨このため、イザベルとフェルナンドは「カトリック両王」と呼ばれる。

⑩神聖ローマ帝国皇帝は、理念上、カトリック世界の政治的リーダーであった。とくにカール5世の治世は、プロテスタントやオスマン帝国など、異宗派や異教徒との戦いが激化する時期と一致していた。